慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	テオドール・フルルノワ『インドから火星へ』：第五章火星の輪廻 (1) (翻訳)
Sub Title	Théodore Flournoy, Des Indes à la planète Mars : chap. 5 Le cycle martien (1) (traduction)
Author	小野, 文(Ono, Aya)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2021
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.73 (2021. 10) ,p.65- 93
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20211031-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

テオドール・フルルノワ『インドから火星へ』

――第五章　火星の輪廻（1）（翻訳）――

小　野　　文

翻訳者付記

以下に訳出するのは Théodore Flournoy, *Des Indes à la planète Mars. Étude sur un cas de somnambulisme avec glossolalie*（テオドール・フルルノワ著、『インドから火星へ――異言をともなう夢遊病の一症例に関する研究』、初版 1900 年）の第五章前半部分（原著 133–156 頁）である。すでに第一章「事のおこりとあらまし」は、慶應義塾大学日吉紀要『フランス語フランス文学』第 54 号に訳出しており、その際に短い紹介文を付けたので、関心のある向きはそちらを参照いただきたい。

ここまでのおおまかなあらすじを述べておこう。ジュネーブ大学心理学教授テオドール・フルルノワは、1894 年、ジュネーブ大学の同僚の家で開かれていた交霊会に出席するようになる。この会の中心である霊媒嬢エレーヌ・スミスは、素人ながら強い霊媒能力を持ち、ジュネーブの心霊主義者のあいだでは有名になりつつあったが、フルルノワは彼女のうちに意識下の興味深いうごきを解き明かしてくれるような心理学的題材を認めたのであった。フルルノワの期待を大きく上回り、エレーヌ・スミスは前世や宇宙の夢を見るようになり、参加者は火星や古代インドをエレーヌの語る幻のなかに見せられる。

第五章はその「火星の輪廻」を詳しく語る章であり、次の第六章の「火星語」に関する章に繋がって、この壮大な記録の一つの核をなす部分である。

今回は長大な第五章の前半部分のみを掲載し、後半は次号に廻す。またこの第五章から第六章には図版も数多く載せられているが、今回は火星の風景［図 14］と植物の絵［図 15、16、17］のみ最後に掲載し、残りは割愛した。

*

第五章　火星の輪廻（前半）

本書のタイトル『インドから火星へ』に従うなら、火星の輪廻の前にインドの物語を研究しなければならないのだが、方法に関する考慮から、私は順序を逆にすることにした。単純なものから複雑なものへと移行したほうがよいし、火星という惑星がインドよりはるかに未知のものであるにしても、この惑星がスミス嬢の下意識の精髄に着想を与えた物語は、東洋の輪廻と比べてどちらかといえば説明しやすい。実際、こちらが純粋な想像にしか属さないように見えるのに対し、東洋の輪廻においては実際の歴史的要素に出会うことがあり、エレーヌの記憶と知性がどこでそれを汲み取ることができたのかを知ることは非常に難しい。つまり古い心理学者の言葉を借りるなら、火星物語においては一つの力が働いているのに対し、東洋の輪廻においては複数のものが作用しており、それゆえ、この非常な心理学的複雑さから、二番目に取り組まれるべきなのである。

火星のメッセージの多くが伝達手段として用いた未知の言語は、この輪廻の他の要素と切り離すことはもちろんできないが、この言語は特別な考察に値するので、もっぱら次章をこれに充てるつもりである。火星物語の起源と内容を扱う本章では、物語の出現と最初の発展に伴って現れたという限りにおいて、この言語が紹介されることになろう。

Ⅰ．火星の輪廻の起源と出現

「我々は期待しようではないか、現在の我々の科学が知らない方法によっ

て、別世界の住人の存在に関する直接の証言が得られる日、そしておそらく、この宇宙の兄弟達と交流が取れる日が来ることを」と、火星に関する見事な著作のなかでカミーユ・フラマリオン氏は述べている[1)]。著作の最後のページで、彼は同じ考えに再び戻っている。「未来の科学は一体いかなる驚異を我々の後継者たちに用意しているのだろうか、その科学は火星の人間と地球の人間がいつかお互いに交流することを断言さえしてみせるだろう！」[2)]。

この華々しい未来図は、無線通信が可能になった今でさえ、まだ少々遠いもののように見えなくもないし、また仮に我々の実証科学の現在の構想に限って言うなら、ほとんどユートピア幻想を花咲かせているように見えなくもない。しかしこの狭い枠組みを乗り越え、例えば交霊術がその幸せな信奉者の眼前に拡げる無限の地平に身を投じてみるが良かろう。そうすればすぐにも先ほどの淡い期待は形をとりはじめ、夢の間近な実現に抗するものはもはや何もなくなるだろう。そのときあわや驚きかねないただ一つのことと言えば、別の惑星の人類との最初の媒介役として我々に奉仕してくれる、世界でも類をみない功績を帰せられる特権を受けた霊媒の登場を、いまだ目にしていないことである。というのも、交霊術にとっては、空間のバリアが時間のバリアより問題になるということはないからだ。「どこにでもいけるドア」は霊媒の前に広く開いているのである。方法に関する問題はここでは二次的であって、方法は多すぎて困るぐらいである。それが直感によるものであれ、透視、テレパシーによるものであれ、または時間を全くかけずにこの世の果てまで行き来する旅をするために、霊気に包まれた魂が肉体の殻から一時的に抜け出ることを許す霊体遊離によるものであれ、はたまた天体における幻視、全知の幽体の憑依、「霊気」、あるいは何でもよいのだが他のプロセスによるものであれ、一向にかまわない。本質的な点は、どんなまじめな反論も、このコミュニケーションの可能性に反対するすべを知らないということである。全ては十分な心霊能力をもった被験者を見つけることにある。これは単に事実の問題である。まだ接触が全く行われていないとすれば、そ

1）C. フラマリオン、『火星とその居住条件』、パリ、1892、p. 3。
2）同書、p. 592。

れは時が熟していないからだと思うだろう。しかし天文学者たち自身がこうした「現在の科学が知らない方法」を予感し、欲し、求めている今現在となっては、交霊術――これは明日の科学であり、絶対宗教のように決定的科学である――が程なくこの正当な希求に答えないわけがない。よって人は、まもなく待ちに待った啓示者が現れるのを予測することができるだろうし、良い霊媒は、まさに自分がこの比類のない使命に定められた者ではないかと自問する理もある。

私見では、主要な内容とあらすじにおいて以上のような考えが、スミス嬢の下意識に、火星物語の最初のアイデアをひらめかせたのである。上に引用したフラマリオン氏の文章が直接エレーヌの目に触れたと言うつもりは全くないが、この文章はエレーヌが霊媒活動を始めた当初の雰囲気が持つ一要素を見事に表現し、要約している。というのも、彼女が地球外の惑星やその住人について書かれた著作や、またフラマリオン氏やその他の人の著作のどんなものも読んだりページをめくったりした確証がないとしても、彼女はそれにまつわる話を聞いたことがあるからだ。彼女はこの高名なジュヴィジーの天文学者兼作家の名前をよく知っていたし、彼の哲学的思想についても少し知識があったが、それはこの作家が交霊術者たちの間で培った人気のほどを知っていれば、何も驚くことではない。彼らは、別の天体への転生という教義のために、フラマリオン氏のうちに歓迎すべき科学的な支柱を見つけているからである。そのうえ私がある証人[3] から聞いたところによると、エレーヌが 1892 年に参加していた N 夫人のグループで、会話が火星の居住性に一度ならず及んでおり、それはかの有名な運河の発見が数年前から殊に多くの人々の注意を集めていたからである[4]。このような状況は、エレーヌの下意

3）現在、ソフィア・アレクサンドル病院の医師であるピペルコフ博士は、1892 年にジュネーブに滞在していた際に、N 夫人のグループの交霊会に何回も参加しており、この会についての貴重な情報を私に提供してくれた。

4）スキアパレッリの発見や、ここ20年来のその他の発見、そしてそこから生じた科学的議論は、一般向けの日刊紙に数多くの反響をもたらした。フラマリオン氏の「火星の水害罹災者」（フィガロ紙 1888 年 6 月 16 日）のような大衆向けに書かれた記事や、カランダッシュの「火星には人が住んでいるか？」

識の天文学がこの惑星に没頭した事実を十分に説明してくれるものと私には思える。より昔の霊媒達は、例えば有名なサルドゥー[5)*]の木星の家のように、別の惑星への偏愛を見せていたからである。

もっとも、火星物語の最初の種は、エレーヌの霊媒活動の開始よりもずっと前である可能性が高い。この惑星に関するデッサンのもつ、際立って東洋的な特徴と、「一体それが何なのか分からずに」それでも同じような幻の多くを幼少期に見たと、彼女がはっきりと感じた印象。そこから、この火星の輪廻の素材が集められたのはもっと昔にさかのぼると想定することができる。もしかするとたった一つの同じ源泉をもつ、異国の回想、熱帯の国々の物語やイメージが、交霊術の思想がもつ強力な衝動によって後に枝分かれしていき、一つはインドの物語、もう一つは火星物語という、二つの別の流れとなり、その後も一度ならず水の流れは交わることになったのではないか。しかし物語の源がおそらくスミス嬢の幼少期に根をもつとみるにしても、火星物語では、他の物語でもそうであるが、すでに出来上がった古い産物が隠れた記憶として単に戻ってくる、つまり夢遊病を利用して化石の残余が単純に呼び覚まされて日の目を見る、といったことが問題になっているのではない。私達が目にしているのはまさに活動的でどんどん進化するプロセスであり、それがおそらくは古い要素から糧を得ているにせよ、そうした要素を組み合わせ、独創的なやり方で新しく作り直しているのであって、それだからこそ、とりわけ未知の言語の創造にまで行き着いているのである。この物語の生成過程を一歩一歩追跡するのは興味深いことだろう。しかしいつもながら不幸にも、それは下意識の暗闇に逃れてしまっている。私達はその出現を時折にしか摑むことができず、隠された働きの残り全部は、意識上にのぼるこうし

（フィガロ紙 1896 年 2 月 24 日）のようなカリカチュアを思い出してみるだけでも、火星人という概念が今やどれほど大衆に知れ渡っているかを理解することができる。

5）例えば 1897 年 2 月 20 日のラルース百科事典雑誌 154 頁に載った「ヴィクトリアン・サルドゥー氏の霊媒的デッサン」を参照。

＊［訳注］：Victorien　Sardou（1831–1908）フランスの著名な戯曲家で、交霊術にも関わっていた。

た噴出から、また彼女の意識下に刺激を及ぼしたと考えられる外的影響について私達が持っている非常に稀なデータから、かなり不確定なやり方で推測するほかはない。

しかるにエレーヌの下意識の高度の空想力の活動に下地を準備したであろう会話が為されたのは、1892 年のことであった。それはエレーヌの心に、火星の住民と直接コンタクトを取れるかもしれないという大いなる科学的興味と、学者たちは気づいていないが交霊術が私達に供給してくれている霊媒的手段を用いる可能性という、二重のアイデアを植え付けたのだった。しかしこうした動き全てに弾みをつけるような、もっと具体的な何らかのきっかけなしに、周囲からの曖昧な示唆だけで火星の夢が生み出されるに十分だという意見には、私は疑いを持っている。なぜなら二年以上の間、それは開花しようとしなかった訳であるから。残念なことに、資料もないために、エレーヌの下意識の想像力がいつ、どのような状況でこうした効果力ある刺激を受けたのかを正確に知ることは容易ではない。しかしながらその痕跡は、スミス嬢の最初の火星交霊会とも言うべき会の記録そのものに残されているのだが、それをこれからご覧に入れよう。けれども話はそれより少し前から始めたほうがよいだろう。

1894 年 3 月、エレーヌはルメートル氏と知り合いになるが、そのルメートル氏は異常心理現象に強い関心を抱いており、別の人達の家でエレーヌの交霊会の幾つかに出席した結果、彼女に自分の家で交霊会を開いてくれるようにと頼むことになった。エレーヌはそこで最初の回（1894 年 10 月 28 日）から、尊敬と同時に同情に値する、ある未亡人と出会う。かなり重い眼の疾患に苦しんでいたこと以外に、ミルベル夫人――私はルメートル氏がこの交霊会の報告のなかで彼女に与えた仮名を踏襲することにする――は、その三年前に、ルメートル氏の生徒でもあったアレクシという名前の 17 歳の一人息子を亡くすという極度の心痛を経験していたのであった。まだはっきりと交霊術に確信を持つには至らずも、ミルベル夫人が、何かの証拠さえ貰えれば、この慰めを与える教義を信じるにやぶさかではないと感じたのは理解できる。その証拠として、彼女の愛した子供からのメッセージ以上に感動

的なものを彼女が望めただろうか？　そういうわけで、不幸な母に幾ばくかの気晴らしの時間を得させたいと思って、ルメートル氏がよこした招待にミルベル夫人が応じたのも、このようなコミュニケーションを手にすることができるのではという何らかの隠れた希望がなかったわけではないだろう。エレーヌの交霊会にはしばしばあることだが、この最初の会もまた列席者の願いに十分に答え、その期待を上回るものだった。ミルベル夫人に関することだけに限れば、エレーヌはヴィジョンを見たが、そこではまず故アレクシ・ミルベルと判断するに十分な、詳しく描写をされた若い男性が現れ、その後、テーブルが「ラスパイユ」と綴りで説明した老人が、若い男性につれられて、彼の母ミルベル夫人の目を治療するために登場した。夫人は息子から優しい言葉をテーブルの綴りによってかけられるだけでなく、ラスパイユからは、目の病気に関して、人気のある『健康の手引き』の著者がそのまま言いそうな、樟脳を用いた治癒方法の指示を受けるという二重の特権に恵まれた。ちなみにこの会では、多少なりとも火星に結びつくものは全くなく、このアレクシ・ミラベルが後に、火星語の公式の通訳、エズナルという名で出てくると予測できるものもなかった。

一ヶ月後（11 月 25 日）にルメートル氏宅で開かれた二回目の交霊会には、またミルベル夫人も参加していたが、それは前回とは別の運びとなった。この会では、初めて登場することとなった天文に関する夢が一挙に発展し、交霊会全体を支配した。

> 記録によれば、最初からスミス嬢には遠方の高いところから強い光が見えていた。その後、彼女は心に動揺がはしるのを感じ、それから頭が空っぽになったように、そして体がなくなってしまったように感じた。彼女は自分が深い霧のなかにいると知ったが、その霧は次々に青から濃いピンクになったり、灰色や黒になったりするのであった。エレーヌが言うには、彼女は空中に浮いており、そして一つ軸のテーブルが、浮きながら非常に不思議な動きを見せ始め、それはまるでつねに同じところで回転を続ける螺旋の動きのようだった。それから彼女は大きくなって

いく星を見たが、それはどんどん増大し、ついに「私達の家より大きく」なった。エレーヌは昇っていくのを感じた。そしてテーブルは綴りだした：「ルメートルよ、おまえがあんなにも望んだことだ！」――気分が悪そうだったスミス嬢は、良くなった。彼女は三つの大きな球体を見たが、そのうちの一つは非常に美しかった。私は何の上を歩いているのかしら？と彼女は尋ねた。そしてテーブルは答えた：「火星の上だ」。

エレーヌはそれから、彼女の目の前に現れて、驚きとともに楽しさを引き起こす、おかしな物全ての描写を始めた。火の粉を発しながら滑っていく、馬も車輪も付いていない車体。屋根の上に噴水がある家々。カーテンの代わりに羽を広げた鉄の天使がついている揺りかご、等々。不思議さの度合いが低いのは人々のほうで、彼らは全く私達と同じ風で、違うところといえば男女とも似たような服装、すなわちゆったりとしたズボンと、模様飾りがあってウエストのところで絞られた長いブラウスを着ていることだ。会の後で記憶を頼りにエレーヌが描いたクロッキーによれば、揺りかごの中の子供も私達のと同じようである。

最後にエレーヌは、火星で広大な講演会場のようなものを見た。そこではラスパイユが教鞭を執っており、聴衆の第一列にアレクシ・ミルベルが座っていたが、叩音の交信で書き取らせたところによると、彼は自分の母親が一ヶ月前に受けた医学的処方に従わなかったことを非難していた。「お母さん、あなたは私達にこんなにも信頼をおいていないのですね。あなたがどんなに私に苦しみを与えたか、あなたは知るよしもないでしょう」。それから私的なレベルの会話がミルベル夫人と、テーブルの叩音で答える息子との間にあった。その後、全てが静まり、火星のヴィジョンは少しずつ薄れ、テーブルは会の始まりのときと同じように一本足の軸で回転する動きを再び始めた。スミス嬢はまた霧のなかを通って同じ道を反対方向に辿った。それから彼女が「ああ、戻りましたよ！」と言うと、かなり強い叩音が鳴って会の終わりを告げた。

様々な面で重要性を見せる、この最初の火星交霊会の主な輪郭を述べた。

地球から火星への旅に対応する最初の一連の体感幻覚は、科学的問題や論理の要求にほとんど邪魔されることのない想像力の子供じみた性格をよく反映している。おそらく、惑星間の横断がもつ物質的障害は、純粋に霊媒的・霊的な移動のなかで消滅していると交霊術は説明するだろうが、それならばなぜ悪心、ぐらつき、浮遊などの身体的感覚が続いたのだろうか？――ともあれ、この一連の感覚は、それからというもの火星の夢の習慣的前奏として、前兆的なアウラのように残ったが、会によって幾らかの変化を伴うこともあった：ときにこうした感覚は、聴覚的幻覚（うなり声、噴水の音など）、あるいは嗅覚的幻覚（燃えたものや硫黄、嵐の嫌な匂い）さえ併発することがあった。またしばしば、この身体的感覚は短くなったり簡単になったりした。例えば最初の悪心の名残の、短い眩暈となったり、あるいは、最初に出てくる、ほとんどの場合眩しく赤い、光の幻覚となったりする具合だが、この光のなかから、徐々に火星のヴィジョンが描き出されてくるのである。

しかしながら私が特に注意を惹きたい一点は、スミス嬢が遠くの星に着いたとき、そしてそれが何の星なのかを知る前に、テーブルが示した特異な書き取りである。「ルメートルよ、おまえがあんなにも望んだことだ」。火星物語全体のまさに扉のページに書き込まれた献辞とも言える、最初に表されたこの言葉は、私の考えでは、もともとルメートル氏の望み、すなわちエレーヌの知る限りでは、はっきり時期は分からないがここ最近になって氏が望み始めたことで、それが天文の夢に導く最初の暗示の役割を果たしたのだが、その望みへの直接の答えだと見るべきであろうし、またそう解釈すべきであろう。ルメートル氏自身も、この前置きのような予告が何を指しているのか、聞いたときには全く分からなかったが、しかし彼が記録の最後に挿入した註は、この点に関して示唆を与えてくれる。

> 私はテーブルが書き取らせた最初の言葉「ルメートルよ、おまえがあんなにも望んだことだ！」をどのように説明したらよいのかよく分からない。S 氏は、前年の夏、私が彼と交わした会話のなかで、私が彼に「他の惑星で起こっていることを知れたら、どんなに面白いだろう！」と

言ったと思い出させてくれた。もしこれがかつての望みの答えなのだとしたら……よかろう！

付け加えておきたいのは、このルメートル氏の願いにかなり驚いたために何ヶ月かたった後も思い出すことができたＳ氏は、この間ずっとスミス嬢の交霊会のまさに最も忠実な参加者の一人であった。そして交霊術の集会の前後や会の最中のおしゃべりのことを経験上知っている者には疑いの余地のないことだが、ルメートル氏が他の惑星の住人に関する我々の無知を残念がっていたのをスミス嬢が伝え聞いたのは、このＳ氏を通じてだったのである[6)]。この火星のアイデアは、例会に連動しつつ会の前後にもはみ出している、暗示にかかりやすい状態にエレーヌがあったときに、おそらくぱっと捉まえられたものだろうが、彼女がルメートル氏の家で交霊会をするようにと招かれたときから新たな力を伴って戻り、彼女のうちにつねに潜在的に宿る気遣い、すなわち彼女がいる家の人々にとってできるだけ興味深いヴィジョンを持とうとする配慮によって、活気づけられたのであろう。私の考えでは以上のようなことが種となり、その種が火星の住人と霊媒との交流の可能性に関する会話によって養分を与えられた土地に落ちて、大河小説の芽生えとあいなったのだが、その小説の後の発展についても跡を辿らなくてはならない。

ただ先ほど要約した例会において、まだ指摘しておくべき箇所がある。すなわち一方で火星本来のヴィジョンと、他方でラスパイユとアレクシ・ミルベルの再登場との繋がりがもつ、非常に不自然で弛んだ性格である。これらの人物がここに何をしに来ているのかは、全く理解できない。ただ単に前の例会で始められた会話をミルベル夫人と続けるために、その他の惑星の介入はなしに、なぜ今日、彼らは火星上に身を置かなくてはならないのか？　彼らを閉じ込めている講演会場は、同時に火星に閉じ込められているわけだが、

6）あるいはずっと単純に考えればそれはルメートル氏自身だったのかもしれない。すでに述べたように、彼は 1894 年の春と夏、エレーヌの複数の交霊会に出席していたからである。

彼らとこの星を結びつける仲立ちをしているこの場所は、描写上はとくに何の火星らしさも持っていないために、なおさら作り物の感がするし、私達の地上から借りてきたように見える。この出来事全ては実のところ前段階であって、ミルベル夫人は直接関わりがあるから関心の惹かれることであろうが、火星の世界とは何の本質的な関係もないのである。言い換えるなら私達が目にしているのは、夢の世界にはありがちな、想念の合流や混合であることは一目瞭然である。この交霊会の素材となったのはもちろん、ルメートル氏のために用意され、かなり長い準備期間を経て熟した、天文学的インスピレーションである。しかしミルベル夫人の出席が再び、前回の交霊会がもっぱら関わっていた彼女の息子とラスパイユの記憶を目覚めさせ、火星のヴィジョンと競合したその記憶が、ミルベル夫人と直接の繋がりはないまま不可思議なエピソードのように、どうにか組み込まれたのである。統合・ドラマ化のはたらきによって、ちぐはぐだった想念の二つの流れは調和づけられ、会議場を媒介としてお互いの中に溶けあったのであるが、こうしたはたらきは、私達の夢の幻想のなかで繰り広げられるものと何ら変わるところはなく、そこでは全く異質な記憶がしばしば予期しない方法で結びつき、非常に奇妙な筋書きを生み出すのである。

しかし霊媒の交信が普通の夢とどう違うのかを述べたい。

普通の夢は、一貫性がなくとも、別に大したことではない。この一貫性のなさは、目覚めてそれについて考えるとき、私達を驚かし、またつかの間楽しませたりもする。ときにそれは、夢のもつれた糸を解きほぐし、気まぐれな連想や前日にあった接触のなかに錯綜した糸の起源を見出そうとする心理学者の注意を少しばかり長く引くこともある。しかし結局のところ、こうした一貫性のなさは、後の私達の思考の流れに影響を及ぼさない。私達は夢のなかに、それ自体は価値がなく客観的な意味も持たない、偶然の結果しか見ないからである。

霊媒の交信については事情が異なるが、それはそこに与えられている重要性と信用のせいである。自分の無意識的動作を部分的に覚えている霊媒、あるいは交霊会の後に何が起こったのかを注釈付きで話してくれる出席者に事

欠かないような霊媒は、この神秘的な啓示を気にかけることになる。パラノイア患者がまこと取るに足らない偶然の一致に隠れた意図や深い意味を見いだしたりするように、霊媒は自分の見た奇妙なヴィジョンの内容を調べ、それについて熟考し、交霊術的観念に照らして検討するのである。もしそこで困難や矛盾、あまりにも甚だしい脈絡のなさに出会うときには、意識的思考あるいは下意識的思考（この二つはつねに一致するわけでは全くない）はそれらの消去、そして現実に残る夢の創造物が彼に押しつける問題のまずまずの解決に、全力を傾けることになり、後におこる夢遊症は、この解釈や訂正のはたらきの徴を帯びることになる。

これがスミス嬢の天文に関する物語の初段階から起こったことである。11月25日の交霊会における、火星とアレクシ・ミルベルのあいだの全く偶発的で不慮の結びつきが、二つの間の決定的な溶接となった。偶然の隣接による連想が、論理的な結合と化したのである。もしこの若者が我々のいるところの隣の世界に現れたとすれば、それは彼が地上の生を終えて、そこに確かに転生したから、というわけだ。以上が、交霊術の観点からすれば非常に自然な、下意識の理由付けであり、それがその後の物語に重要なテーマの一つを与えたことになる。

Ⅱ．火星の輪廻のその後の発展

火星の輪廻の発展は、規則的にではなく、多少長い休止を挟んで、不規則で発作的に行われた。1894年11月25日の交霊会に始まったかと思うと、ほぼ15ヶ月間、姿をくらましたが、これは火星の夢を抑圧する新しい関心事のせいであって、こちらの方が1895年の一年を通して前面に押し出てきたのである。

> このスミス嬢の閾下の夢の流れの変化に関しては、私が不慮の原因となったのかもしれない。実際それは、スミス嬢がルメートル氏の家で開いていた交霊会に、氏が私を招いてよいかとスミス嬢に許可を求めた頃であるからだ。彼女は同意したが、そこには幾ばくかの葛藤があったよ

うである。つまり一方で、霊媒能力について嘆かわしいほどの疑い深さが染みこんでいるだろう大学教授の、批判的でおそらくは敵意を含んだ視線にさらされる心配があり、もう一方で、この強情な不信者を納得させられるのではないかという隠れた期待があったのである。もし説得に成功すれば、交霊術の主義主張にとっては無視できない勝利となるだろうゆえに、結局はこちらの期待のほうが勝ったのだ。よってスミス嬢と個人的に知り合いになる以前から、私が彼女の意識的あるいは下意識的な関心事において、私がある役割を演じていたかもしれないと解釈できるが、その役割はその後もますます強調されていったということは、様々な手がかりが示している。まず、私の家族に関する過去知だが、これは私が参加した最初の何回かの交霊会の主要な部分を占めた。次に私が出席したことによって、彼女の部分的な自動症が完全な夢遊症に突然変化した（［原著］30 頁を参照のこと）。またレオポールは私にやたらと多くの配慮にあふれたアドバイスをしてくれた。最後に、そしてとりわけ、インドの物語の出現と急速な発展があるが、そこではこれから見るように、私が名誉ある席を占めている。――いずれにせよ、私がエレーヌの交霊会に出席を許されて、火星物語の最初の登場に続く次の会合（1894 年 12 月 9 日）に出始めてから、この物語の長い中断が始まり、次にそれが急成長するのは 1896 年の 2 月になってからだった。

この中断には、おそらく別の原因も関係していると思われるし、また異質な気分転換の効果を見るだけでなく、同時に、火星の夢の改良とその後示される新しい言語の準備に必要な、隠れた準備期間を見る必要があるだろう。向こうの住人にいっぷう変わった固有言語を話させるようスミス嬢を仕向けた外的な要因について、私は全く知らない。しかしそれが起こる可能性はあったし、このように自然なアイデアがエレーヌの下意識的思考に近づき、火星語の最初の自己暗示となったのかもしれない。すでに見たように、1894 年 11 月、アレクシ・ミルベルは、ラスパイユとともに火星にいたにもかかわらず、ルメートル氏の居間のテーブルを介して母親とフランス語で会

話をしていた。普通の夢のなかであれば重要視されない、一貫性と論理性の欠如の滑稽さがここには見受けられたが、これが霊媒のヴィジョンとなると、しっくりこないし、のちのち説明と訂正を要したのだった。これがエレーヌの閾下の想像力が、外側ではインドの輪廻やその他の多くのことを生み出しながらも、隠れて専念しなくてはならなかったことである。火星物語を成熟させ、そこに幾つかの手直しを加えるために、一年と少しの猶予を彼女は確実に利用したのだった。

1894 年 11 月の交霊会に比べ、1896 年 2 月の会（レジュメは後述）は実際、興味深い刷新を提供している。ラスパイユは登場せず、これ以降、再び現れることもなかったが、これはおそらくミルベル夫人が彼と彼の処方をあまり重視しなかったためであろう。反対に、気の毒な母親の愛惜と願望の唯一の対象であるミルベルの息子が、そこでは最前面を占め、ヴィジョンの詳細全てにおいて中心的な役割を果たす。今や彼は火星語を話し、フランス語をもはや知らない（奇妙なことに、彼はまだ聞いて理解はしているようなのだが）。しごく当然のことながら、会話には多少問題をきたした。その上、我々の地上のテーブルをあちらで動かすわけにもいかないのだから、霊媒を介して、スミス嬢に一時的に乗り移りながら、彼はそれ以降、自分の母と交信したのである。

この最後の二点は、今度は幾つかの問題を引き起こすが、それは原因や暗示のように作用しながら、後に火星物語に新たな一歩を踏み出させることになる。すなわち、アレクシ・ミルベルは、火星人としての存在に閉じ込められているままでは地上の霊媒に乗り移りに来ることができないため、その存在にすでに別れを告げ、惑星間宇宙を漂う必要があるのだ。この霊体状態あるいは不安定状態は、同時に彼が火星語からフランス語へ翻訳してくれるのを可能にする。それというのも交霊術に依れば、霊肉分離の状態のときには、人は一時的に以前の存在や様々な言語の記憶を取り戻すからだ。以上のような情報を前もって述べておくことは、主要な局面をレジュメする際、夢遊症の物語の筋に、より楽に付いていけるよう読者を助けるであろう。

1896年2月2日。以下に番号を付けて、この会の主要な局面のレジュメを述べる。会は2時間半以上続き、そこにはミルベル夫人も出席していた。

1. 半夢遊状態が深まり、今いる場所の意識が段階的に失われる。――最初から、テーブルはミルベル夫人の方に何度も傾き、これから準備されている舞台が彼女のためであることを示唆していた。一連の初歩的な幻視（虹や色など）の後、ミルベル夫人にもう何も見えなくなったと報告しながら、エレーヌは立ち上がり、テーブルを離れ、想像上の女性と長い会話を始めたが、その女性はエレーヌに、車輪もなければ馬もない奇妙な小馬車に乗るように言っているのだった。エレーヌはこの女性に対して苛立ちを感じたが、女性は最初フランス語でエレーヌに話しかけていたのに、今度は執拗に、理解できない、中国語のようなことばで話し始めた。レオポールは我々に、幾度も小指を用いて、これが火星の言語で、またこの女性が、火星人に乗り移ったアレクシ・ミルベルの現在の母親であり、エレーヌ自身も火星語を話すようになるだろうと明かした。実際ほどなくスミス嬢は、言葉を繰り返せるようにもっとゆっくり話してくれないかと話し相手の女性に頼んだ後、訳の分からない奇妙な言葉をどんどんとめどなくしゃべり始める。以下がルメートル氏ができる限り正確に書き留めた、彼女の話の最初の部分である。mitchma mitchmou minimi tchouanimen mimatchineg masichinof mézavi patelki abrésinad navette naven navette mitchichénid naken chinoutoufiche... ここから話のあまりのスピードに、言葉の切れ端しか拾えなくなった。téké... katéchivist... méguetch あるいは mékétch... kéti... chiméké。数分経って、エレーヌは中断して叫んだ。「ああ、もう十分よ、そんなに言ってくれても、私は絶対繰り返していうことなんてできないわ……」そして、しばらく抵抗した後、彼女は話し相手の勧めに従って火星へと彼女を運ぶ馬車に乗ったのだった。

2. トランス状態は今や完全なものになった。立ち上がったエレーヌは火星への旅を三段階に分けて身振りで演じてみせた。その意味は明ら

かではあったが、レオポールが解説してくれた。すなわち上半身の規則的な揺れ（地球の大気を通過）、不動になり、完全に硬直（惑星間の真空）、新たに肩と胴体の揺れ（火星の大気）。――火星に到着して彼女は馬車を降り、火星の挨拶を表す複雑なパントマイムを行った。それは手と指のバロック的な身振りであり、片方の手でもう一方をはじいたり、あの指この指で、鼻や唇、顎などを軽くたたいたり触れたりするものだった。また大げさなお辞儀、グリサード、足を床の上で回転させる、等のしぐさであった。それはどうやら、向こうの世界での、人に最初に会って挨拶するときの仕方らしい。

3. 一種のダンスのような仕草が、出席者の一人にピアノを弾くというアイデアを与えたのだが、それを聴いてエレーヌはすぐさま、火星とはもう何の関係もない普段の催眠状態で地球上に落ちてきた。音楽が止むと彼女は、先ほどの火星の幻と、自分の地上の存在の感覚が半分混じったような混合状態に入った。彼女は自分に語りかけ始めた。「この夢はやっぱり可笑しいわ……これはルメートル氏に話さなくては……彼（火星人アレクシ・ミラベル）が私に「今日は」と言ったとき、彼は鼻を軽く叩いていた……彼は私におかしな言語で話してたけど、でも私はよく理解できたわ……」等々。家具にもたれて床に座りながら、彼女は小声でフランス語の独り言を続け、自分が驚いた見解を織り交ぜつつ、夢を辿り直していた。例えば彼女が見たのは、若い火星人（アレクシ）が単に大きな男の子で、彼の話では 5、6 歳にしかなっていないこと、また夢の女性が彼のお母さんにしては非常に若く見えること……。

4. ため息、しゃっくり、そして筋の緊張緩和を伴う深い眠気という、通過的段階を経たのち、彼女は再び火星の夢遊病状態に入り、不明瞭な言葉をつぶやき始める。késin ouitidjé... 等。私は彼女にフランス語で話すよう命令を言い渡す。彼女は私を理解したようで、苛立った高圧的な口調で私に火星語で返す。私は彼女に名前を尋ね、彼女は basimini météche と答える。前段階で彼女がずいぶん話題にしていた若者アレクシ・ミルベルに、彼女自身が「憑かれて」いると考えた私は、ミルベル

夫人に彼女に近づくよう促し、それから実に想像を超える感動に満ちた憑依の場面が始まったのだった。ミルベル夫人はいきなりわっと泣きむせびながら再会した息子の側に跪き、息子はおしみなく深い愛情のこもった仕草をして彼女の両手をなでていたが、それは「最後の病気の間、彼がよくしていた動作そのもの」であり、その間ずっと、彼女に火星語で話しかけていたのだが（tin is toutch...）、かわいそうな母はそれが理解できずとも、たいそう優しさのあるアクセントと心に触れるイントネーションは、慰めと子としての思いやりに満ちた言葉であることは容易に分かった。この感動の二重唱は10分余りも続いたが、エレーヌが再度、嗜眠性の眠りに落ちたため終わりを迎え、それから15分後に火星語を短く話しながら彼女は目覚めたが、その後はすぐさまフランス語の使用を始め、いつもの状態になったのだった。

5. 何が起こったのか尋ねられて、エレーヌはお茶を飲みながら、自分が見た夢を話した。彼女は宇宙空間横断と火星上で見たことについての、かなりはっきりとした記憶を持っていたが、若者の記憶に関しては例外で、彼については憑依のシーンも含め、何も覚えていないのだった。だが突然、会話をしながら、私達と自然におしゃべりを続けていながら自分では気づいていない様子で、彼女は再び火星語を話し始めた。彼女は私達の言葉が全部分かっている風で、非常に自然な口調でこの外国語で答えたが、私達が彼女のことばを全く解さないと話したときには、ひどく驚いたようだった。彼女は当然フランス語を話していると思っていたのだった[7)]。私達はこの機会を利用して、彼女が僅か数日前にC氏の家を訪れたことについて質問し、そこにいた人の数と名前を尋ねた。そこで我々は、エレーヌが固有名詞を発音したことから、次の四つの火星語を同定できた。Mélich S「S氏」、Médache C「C夫人」、Métaganiche Smith「スミス嬢」、kin’t’che「4」。その後、彼女はずっ

7）周囲のドイツ語を解しながら、それとは気づかずに英語でのみ話していたアンナ・Oのケースと比較せよ。ブロイラー／フロイト共著『ヒステリー研究』（前掲書、p. 19）。

とフランス語で通した。今しがた起こった出来事について、彼女はとても驚いており、C 氏家の訪問の話を今晩したことについて、おぼつかなく曖昧な記憶しか持っておらず、上にあげた火星語を私達が繰り返してみせても、何も知らず、理解もしていなかった。

この会合のあいだ何度も、私はエレーヌに、火星の夢から覚めて合図があれば、彼女が発話した火星語とその意味の記憶を取り戻してくれるようにと示唆したのだった。しかしこの間ほとんど絶えずそこにいて、あれこれの指で返答していたレオポールは、この命令は成し遂げられないだろう、また今夜は翻訳が得られないだろうと宣言した。実際、繰り返された合図自体は効果がなかったが、睡眠後のお茶の時間に火星の夢が再び戻ってきたのは、効果が遅い実現の兆しをみせたと言ってもよいのかもしれない。

火星語が最初に現れたこの交霊会を、細かい点も含めてレジュメすることが私には必要と思われたのだが、それは読者に私達が入手できた細部を全て差し出せるようにとの考えからだった。言うまでもないことが、絶対的な厳密性の保証はできない。誰でも、見知らぬ言葉の音を記すのがどれほど難しいことかご存じだろう。

会の最中にかろうじて書きとめられた火星語の例と、上の四つの語との間には、興味ぶかい違いが見受けられる。何度もエレーヌによって繰り返された四つの語は、睡眠後の夢から戻ったときに、発音と意味が完全にはっきりと決定づけられるものであった。これらの語から判断するに、火星語はフランス語の子供じみた模造品でしかなく、火星語のそれぞれの語は、フランス語の語と同じ音節の数を持ち、また幾つかの目立つ文字も同じである。反対に、夢の最中に得られた火星語の文は、もっと後に得られる翻訳された文章の助けを持ってしても、それが何であるのか見当がつかない。以後は珍しくなった有り余るほどの饒舌に特徴付けられる、この火星語の最初の噴出は、疑似火星語でしかなく、何らかの偶然に発された音の連なりで実の意味を持たず、子供達が遊びのなかで中国語やインディアン語や「原始人語」を話す

空想をしあうときに用いる、でたらめの言葉のようなものと思われる。そして本当の火星語は、幾つかの孤立した火星語の正確な対応語を得たいという出席者たちのはっきりとした欲求に答えるために、フランス語のぎこちない変形によって、半夢遊状態の夢の後の接触においてのみ、生まれ出たのである。

交霊会の間に語られた火星語らしきものの翻訳は同じ晩には得られないだろうとするレオポールの言葉と、じっさい翻訳を得られなかった事実は、すでに述べた仮説を補強してくれる。第三段階において自分の夢を思い出しながら、この見知らぬ外国語をよく分かった気持ちがしていたエレーヌの状態は、矛盾を呈しているわけではない。なぜなら、同じ例に戻って考えれば、異国の言葉を話しているふりをして楽しむ子供達も、自分達の訳の分からない言葉が表しているはずの思考の意識をやはり持っているからである。どうやら要するに、この新しい言語がすでにこの時期エレーヌの下意識のなかで、流暢に数分の長さの話ができるまで実際に構築されていたとするなら、日常生活のなかで時折少なくとも幾つかの文が自発的にほとばしることもあっただろうし、またそこで火星の人や風景の幻を引き起こすこともあっただろう。ところが、後にあれほどまで頻繁に起こったこの夢が生み出され始めるまでには、最初の発端から七ヶ月以上も待たなくてはならなかった。この半年という期間は、最初の無秩序で訳の分からない言葉に代わって、一言語と呼べるもの――つまり、先ほどの四つの単語のように、的確な語と決定された意味から成るもの――が下意識で作られた、孵化の時間と見てとるべきではなかろうか。

何はともあれ、私達の話に戻るなら、この摩訶不思議な言葉――レオポールは権威をもって火星語以外の何物でもないとした――の予期せぬ突然の登場がわきおこした関心が想像できるだろう。エレーヌ自身、そして彼女の周囲が持った、天上にいる私達の隣人と彼らの自己表現の仕方についてもっと知りたいという自然な好奇心が、下意識の夢の発展を推し進めたに違いない。次の交霊会は彼女の約束どおりに始まったかに見えたが、残念ながらそれは守られなかった。

1896年2月16日。交霊会の最初から、エレーヌはアレクシ・ミルベルの幻を見たが、彼はテーブルの交信で、フランス語を少しも忘れていないこと、また前回の火星語の言葉の翻訳をすることを述べた。しかしこの予言は実現しなかった。今日はエレーヌの調子が悪かったのか、あるいは彼女に嫌な感じを与える人が来ていて夢の発生を妨害したためか、もう少しで出てきそうだった火星の夢遊状態は成功しなかった。エレーヌは不明瞭な状態に留まっており、そこでは現実の気持ちと、意識すれすれの火星の思考が、混じり合ったり互いに判別しにくくなっていた。彼女は出席者とフランス語でおしゃべりしたが、あちらこちらで別な言葉を混ぜており（méche, chinit, chéque のような言葉で、文脈からすると「鉛筆」「指輪」「紙」を意味するようだった）、現に今居る環境に、多かれ少なかれ戸惑いを覚えているように見えた。彼女はとりわけ、R氏が会の記録をとるのに忙しいのを見て驚いた風で、本来どのようにすべきなのか明瞭に説明できないものの、羽ペンや鉛筆をもって書くやり方が風変わりで馬鹿げたものに見えたらしかった。このシーンで重要なのは、火星の特殊な書き方についての思考（それは一年半後に現れ出てくる）が見え始めていることである。

ほぼ完全に失敗したこの交霊会は、この時期の最後の会であった。商店で長いことたったままで、過剰な労働にさらされていたエレーヌの健康は悪くなり、彼女は［原著］55頁で問題になっていたような完全な休息を余儀なくされたのだった。いわゆる交霊会のない6ヶ月間の間、彼女が過剰なほどのヴィジョンや自発的な夢遊症に見舞われがちだった事実についてはすでに指摘した。しかしこの自動症はとりわけインドの輪廻やその他のことに関連しており、はっきりと火星物語に属する夢を彼女が見たとは私は考えない。その代わり、彼女が回復して普段の生活に戻るとすぐに、火星物語は強度を増して再出現するのが見て取れたが、それは次に述べる夜のヴィジョン以降であった。

1896年9月5日。エレーヌが語るには、彼女は朝の3時15分に起きて、窓辺で風にさらされていた花を中に入れたが、すぐにもう一度眠る代わりに、ベンチに腰掛けるようにベッドに座り、そして目の前に異国の風景と人々を見た。彼女はバラ色がかった青の美しい湖の畔にいて、そこには橋が架かっていた。橋の縁は透明で、オルガンのパイプのような黄色のチューブでできており、一部は水のなかに沈んでそれを吸い上げているようだった（図9参照）。地面は桃色だった。木々は、あるものは幹は上に伸びており、別のものはねじれた幹だった。後に、人々が橋に近づいてきた。そのなかで、一人の女性がとりわけ目をひいた。女性達はお皿のような平たい帽子を被っていた。エレーヌは、これらの人々が誰なのか分からなかったが、彼らと結ばれているような気持ちがした。橋の上には褐色の男性［アスタネ］が両手に何か道具を持っていたが、それは車のランプ（図10）のようで、それに圧力を加えると、かなり強い炎を吹き出すと同時に、空中を飛べるようにするのである。この道具を使って、その男性は橋を離れ、水面をかすめ飛んだあと、また橋に戻った、等々。この絵物語は25分間続いた、というのも、エレーヌが我に返ったとき、ロウソクはまた燃えており、彼女は3時40分という時間を確認した。彼女は自分が眠っていなかったこと、このヴィジョンの間、ずっと目覚めていたと確信した。

それから、自発的な火星のヴィジョンは繰り返され、ますます増えている。スミス嬢がそうしたヴィジョンを見るのは、普段、目覚めて起き上がる前である。ときに夕方、また稀ではあるが一日の他の時間に見ることもある。火星語が新たに聴覚的な形で現れたのは、そうした幻視の最中にであった。

1896年9月22日。近頃、エレーヌは様々な機会に例の火星人の男性を見たが、飛ぶ機械については持っていたり、いなかったりであった。この男性は、例えば彼女が入浴中に、浴槽の足下に現れたりした（図11）。彼女はまた、ふしぎな家のヴィジョンを幾度も見たが、そのイ

メージがあまりに繰り返し彼女につきまとうので、とうとうその絵を描くに至った（図 12）。同時に、彼女は三度、同じ一文が繰り返されるのを聞き、意味は分からなかったが、それを鉛筆で書き留めることができた。dodé né ci haudan té méche métiche astané ké dé mé véche。（6 週間後の 11 月 2 日の交霊会において与えられた翻訳から知るに、この文は、異国風の家はアスタネという名の火星人男性の家であると示している）。

この文章はおそらく火星語であるが、それは何を意味していたのか？　その意味がなんとか明らかになるように、一ヶ月近くもむなしい期待をかけ続けた結果、私は擬似的暗示をかけてみることにした。私はレオポールに手紙を書き、そこでスミス嬢が呈する現象が持つ科学的に高い重要性について考察しながら、彼の博識と良心に訴えかけて、我々の好奇心を刺激しているこの奇妙な言語について、とりわけエレーヌが聞いた一文の意味について、少しでも解き明かしてくれるようにと頼んだのだった。私は彼に、エレーヌの手を用いて、書面で返事をくれるようにと頼み、エレーヌにはレオポール宛のその手紙を手渡し、これを読んで、万一の場合、自動書記の衝動に駆られたときにはそれに従って、レオポールの秘書役となってくれるよう、お願いした。

返事は程なくもたらされた。エレーヌは 10 月 20 日に私の手紙を受け取ったが、22 日の夜、書きたい欲求に駆られ、鉛筆を取って古典的な持ち方、すなわち軸を親指と人差し指の間に置いて（彼女はいつも筆を人差し指と中指の間に置いていたのだが）、レオポールに特徴的な筆跡と彼のサイン入りで、私宛てに 18 行のアレクサンドラン［十二音綴］で手紙をすばやく書いてくれた。以下がその最後の 10 行で、火星語の秘密を明らかにして欲しいという私の頼みに関連したものである。

「そなたを心優しい兄弟のように愛しているからといって
天上の神秘の奥底全てを言うとは思わないでくれ

そなたを大いに助け、道を開きはするが
喜びとともにそれを摑み探すのはそなた自身なのだ！
またそなたが地上に繋がれた彼女を見るとき
彼女の動きのある魂が飛翔して
すばらしい色彩の火星に漂うとき
もしそなたが彼女から幾ばくかの閃きを得たいと願うなら
やさしく、そなたの手を彼女の青白い額に置くが良い
そしてエズナルの愛しい名をそっと発せよ！」

私はつねにレオポールが私に向ける兄のような愛情のしるしに感謝していたが、この時はとりわけ感激して、エズナルという耳慣れない名前には全く覚えがなかったが、示された奇妙な方法を忘れないようにしたのだった。次の交霊会ですでに、この方法を用いる機会は訪れた。レオポールは指でテーブルに示すやり方や他のやり方を使って我々に指示与えながら、エレーヌの火星のトランスの間、この手順を進められるように計らってくれた。

1896 年 11 月 2 日（月）。火星への出発に特徴的な、様々な症状を見せた後（めまいや悪心など）、エレーヌは深い眠りに入る。私は教えられた方法を用いようとするが、右手の指で、レオポールはまだその時が来ていないことを示し、こう書き取らせる。「魂が彼女に憑依したとき、私の命令を実行せよ。そのとき彼女は眠りながらも、火星上で見たことを述べるだろう」。ほどなく彼は付け加える。「肘掛け椅子に彼女を座らせなさい」［普段から彼女が座っていた、居心地がよいとはいえない椅子の代わりに］。そして彼女が穏やかに眠り続けている間、レオポールは彼女が火星への旅の途中だと教えてくれる。あちらに着いたら、彼女は周りで話されている火星語を、これまで習ったことがないのに理解するが、彼すなわちレオポールが火星語を翻訳するのではない。そうしたくないからではなく、できないからだ。翻訳はエズナルがすることで、彼はいま宇宙で霊肉分離の状態にあるが、最近まで火星に生きており、

その前は地球にいたので、通訳ができるのだ、と。

半時間ほど待ったあと、エレーヌの穏やかな眠りは興奮状態に代わり、夢遊病の別の形を取り始めた。溜息、頭と手のリズミカルな動き、そして変わった火星の仕草、微笑、火星に付き添っていると思われるレオポールに向けたフランス語の優しいつぶやきと火星の印象を知らせる言葉。この独り言の最中に、レオポールによる、腕を垂直に挙げる動きがあり、それが彼の指示を実行する時だと知らせる。私が自分の手をエレーヌの額におき、エズナルという名を発すると、エレーヌはそれに弱く優しい、少しメランコリックな声で答える。

エズナルは行ってしまった……私を一人おいて。でも彼は戻ってくる、もうすぐ戻ってくる……。彼は私の手をとって家の中に入れてくれた［その家とは、彼女が一ヶ月前に幻を見て、素描したものである。図 12 参照］。エズナルがどこに連れていってくれるのか、分からなかったけれど、彼は私に Dodé né ci haudan té méche métiche astané ké dé mé véche と言った。私は分からなかった……dodé「これ」né「は」ci「その」haudan「家」té「の」méche「偉大な」métiche「人」astané「アスタネ」ké「～ところの」dé「君が」mé「した」véche「目撃」……「これは君が目撃した偉大な人、アスタネの家だ」。エズナルはそう言った。エズナル、彼は言ってしまった……彼はもうすぐ、戻ってくるわ……彼は話し方を教えてくれる……そしてアスタネは書き方を教えてくれる。

私はこの長いモノローグをかなり簡単に要約したが、彼女の話はつねに沈黙で中断されたので、続けてもらうためには絶えずエズナルの名に頼らなければならなかった。エレーヌの麻痺した脳から毎回幾つかの語を引き出すのに唯一役立つ魔法の語のようにこの名は働いたのである。火星文字の明確な予言を告げる最後の文の後、彼女の弱くゆっくりした声はついに途絶え、レオポールは左手の中指で、彼女の額から手を離す

よう指示を出す。その後はいつものように、嗜眠状態、溜息、カタレプシー、夢遊状態の一時的な戻り、長くない覚醒、などが交互に続く。そして彼女は今度こそ本当に目を開けて、肘掛け椅子にいるのにびっくりする。最初は頭が混乱している様子で、「頭のなかがいっぱいだけど、何もはっきりさせられない」と言う。少しずつ明瞭な意識が戻ってくるが、一時間半続いた会のなかから、彼女は火星のヴィジョンの断片しか覚えておらず、エズナルとその翻訳のシーンの記憶は全くなかった。

最初に実行された時に見たような、この翻訳の手順は、以降はお決まりのものとなった[8)]。あれから二年半以上になる今も、トランス状態にあるエレーヌの額に手をのせ、エズナルの名を発すると、「開けゴマ」の呪文を唱えたかのように、彼女の下意識の層にある火星語＝仏語辞典が開くのである。この儀式の意味はもちろん、暗示によって――レオポールがちょうどよいと判断して、腕の動きで知らせる夢遊状態のある段階で――、この地球外言語の文章を作り上げて楽しんでいる下位人格を目覚めさせることにある。交霊術の用語で言うと、それは霊肉分離したエズナル、つまりはアレクシ・ミルベルに助けを求めるということになるが、二つの惑星を生きたアレクシは、自ら通訳を買って出てくれているのである。この翻訳のシーンが、他の交霊会と変わったところがあるとすれば、それは彼女がこの翻訳を容易に、素早く行ったことである。エズナル［原文ママ］はときにすっかり眠ってしまい、起こすのが難しいことがある。あらゆる口調でエズナルの名を唱えても、エレーヌはメランコリックかつ優しい声で、あくまでお決まりのフレーズを繰り返して答えようとするのである。「エズナル、彼は行ってしまった……ま

8）一語一語の翻訳というのは、上にレジュメした交霊会においてなされたほどつねに一挙に完全なものとして得られたわけではない。例えば（文章 24）、Saïné ézé chiré「サイネ、我が息子」、iée ézé pavi「我が全ての喜び」、ché vinna「おまえの戻り」等々。しかし火星語の単語とフランス語の対応が不確かである場合、疑いのある語を別々に繰り返させて、その結果、正確に一語一語の訳が得られるのである。

た戻ってくる……彼は行ってしまった……もうすぐ戻ってくる……」。この長引きそうな機械的な決まり文句を打ち切り、ようやく火星語の文章の反復と一字一句の翻訳を得るためには、手を軽くあてる代わりに、額にもっと強く力や摩擦を加えなければならない。もっとも声そのものはこの繰り返しの声と変わらず、優しく弱いもので、エズナル自身がエレーヌの発声器官を変更することなしに使っているのか、それともエレーヌがエズナルの言うことを聞いて、それを眠りのなかで繰り返しているのか、ついに分からなかった。しかし火星語の発音に断固とした明瞭性があり、また躊躇や過失が全くないことから、最初の推測が有利のようである。これは霊の乗り移りがあるときに、アレクシ・ミルベル（エズナル）が母親に語る声と同じという事実によっても裏付けられる。

火星の輪廻のこれ以降の表出は、数多くの交霊会を占めることとなり、またスミス嬢の日常生活のなかで自発的なヴィジョンとして現れたりしたが、それをつぶさに語るとすれば、それはうんざりするものとなろう。この物語の内容を語る以下の段落の考察全体から、また次章にまとめる火星語の文章に添えられた説明的レジュメから、読者はおおよその概要を得ることができるだろう。ここで私に残されているのは、エレーヌの火星関連の絵画がどのようになされたかについて一言述べるのみである。図 9 から図 20 の写真がそれにあたる。

これらの絵画のどれ一つとして、完全な夢遊病状態で為されたものはなく、従って、ある種の霊媒のデッサンのように、通常の意識外かつ意識の察知しえない状態でなされる全くの自動筆記の産物ではない。しかしそれらは単にスミス嬢のいつもの人格が為した作品でもないのである。それらはある媒介活動のタイプを表しており、半夢遊病の一状態に対応している。すでに子供の頃からエレーヌが半ば自動的に様々な作品を創作していたようであると以前述べた（[原著] 40 頁）。同じようなことが何度も、彼女が火星のヴィジョンを見る際に起こったのであり、それはときに執拗に彼女につきまとい、ついには彼女にクレヨンと筆をとらせるに至ったのである。描き始める前には、彼女はその仕事の難しさにしばしばたじろいだが、描く時になると、たいそ

う驚くべきことに、ほとんど機械的に容易に、また完璧に出来上がったのである。私はこの現象が現れる際にそばに居たことがないため、スミス嬢の記述からしかそれを知ることがないが、その記述は非常に正確である。例として以下を挙げる。

> ある火曜の晩、すでに横になっていたエレーヌは、ベッドの上に、地上の花とはかなり違う、すばらしい花々を見たが、それには匂いがなく、また彼女はそれに触らなかった。というのもこのヴィジョンの間、彼女には動こうという考えが浮かばず、不動で、また受動的でいたからである。次の日の午後、事務所で、彼女は眩暈がして赤い光で覆われているように感じ、同時に言い表せない強い不快感を感じた［火星への旅の前兆である］：
>
> 赤い光が私の周りにまとわりついて、そして、私がベッドの上に見たのと同じ種類の、信じられないような花々に囲まれているのが分かりました。でもそれらの花には全く匂いがありませんでした。日曜に、見たままに色をつけて、花のクロッキーを幾つか描いてみます。

実際、月曜日に彼女はクロッキーを次の短信とともに送ってきた。

> 私は自分の描いた植物に満足しています。私がほれぼれと眺めたあの植物にそっくりですから。三番目のもの［図 16。これは彼女が絵を描く前に、描くのが一番難しいと嘆いていたもの］は、最後に現れたものですが、あなたが昨日 3 時頃、絵を描く私のそばにいなかったのをとても残念に思います。クレヨンがあまり速く滑るので、どんな輪郭が生まれるのか自分でも分からなかったぐらいですから。大げさな表現を全く使わずに言いますが、このデッサンを描いたのは私の手だけではなくて、見えない力が私の意に反してクレヨンを動かしたのです。紙の上で色調が現れ出てきて、私の筆は私に抗して、用いる

べき色のほうに向かいました。嘘のように聞こえますが、でもこれが正しい真実です。全てのことがあまりに速く行われたので、この小さな仕事で私は全く疲れませんでした。

アスタネの家（図 12、［原著］152 頁）と図 13、図 14 の広大な風景も、同じようにほぼ自動的な（それ以外では完全に目覚めている状態）活動の産物で、スミス嬢には全く満足のいくものであった。それは彼女の閾下の自我とでもいうべきものが、筆をとって気のままに自分の絵画をなしたもので、その絵画は非常に独創的な価値を持っている。その他のデッサンは反対に（例えば［原著］148 頁、図 11 のアスタネの肖像）、エレーヌは大変な労力をかけたのに完全に満足できなかったのだが、これらはエレーヌの普通の人格が描いた、過去のヴィジョンの記憶の単なるコピーと見られるべきもので、そのヴィジョンの思い出は、かなり持続した形で何日後にも心に刻み込まれていたので、まだモデルとして使えたのである。二つのケースとも、しかし特に最初のケースに言えることだが、エレーヌの絵画は彼女の内部で繰り広げられている光景の、忠実な再現と見なすことができるし、それゆえ多くの言葉で記述するよりも、火星のヴィジョンの一般的な性格に関する概要を与えてくれるのである。

かつて天才ケプラーに、そのもつれた旋回路から現代天文学の根本となる奥義を明らかにした輝く惑星――それではこれからエレーヌのメッセージと夢遊病が、この惑星に関して教えてくれる情報がどのようなものか、見ることにしよう。

（第五章　後半に続く）

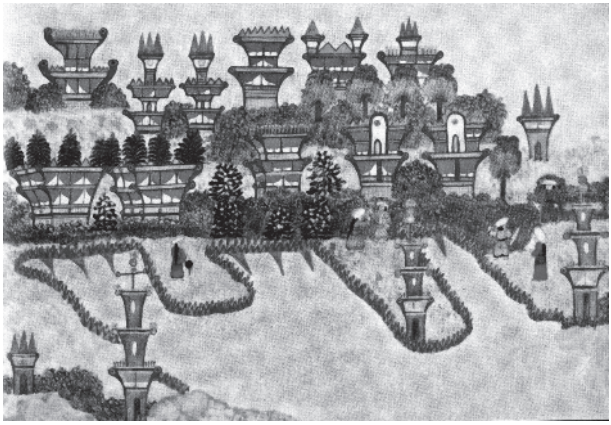

図 14　火星の風景

黄色っぽい空、緑がかった湖、茶色の柵に縁取りされている灰色じみた湖岸。角や頂点がピンクや青の球体で飾られた、黄土色の鐘塔。ピンク色の岩でできた丘と、（花の）ピンクや赤紫や白の模様がついた、わりと濃い緑の植生。赤レンガ色の格子でできている建造物で、角や稜の先端には赤茶のトロンプが付いている。広く白い窓ガラスにはトルコブルーのカーテンがかかる。屋根には黄土色の小尖塔や赤レンガ色のギザギザ模様が付くか、あるいは緑や赤の植物が覆っている。

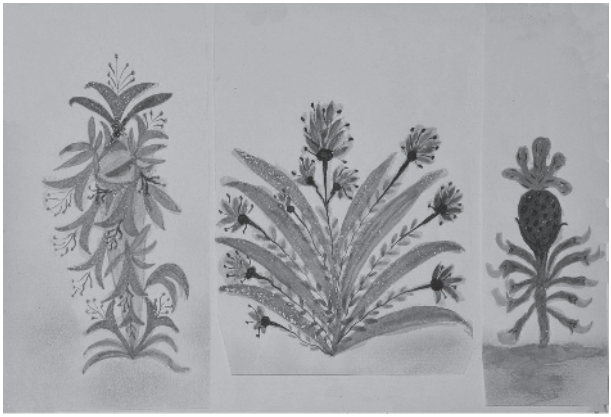

図 15、16、17　火星の植物と花

緑はなし。――図 15 薄い黄土色の茎と葉。花は二裂で明るい赤。そこから黒い網の先に黄色い雄しべのようなものが出てきている。――図 16 薄い黄土色の大きな葉。花は深紅の花弁に黒い雄しべ、黒い茎には小さな深紅の葉が花弁のようについている。――図 17 黒い斑点のついた紫の大きい実、その上に黄色と紫の羽根飾り。茶色い茎には黒い静脈があり、そこに 10 本の同じような分枝が付くが、枝の先には黄色い鉤。地面は赤茶色。